

## 薬剤部 DI ニュース

### せん妄・認知機能低下を引き起こしやすい薬物について

せん妄は、錯覚・幻覚（幻視・幻聴）などの異常体験、精神運動興奮・不安などが加わった特殊な意識障害である。入院患者、その中で特に高齢者ではその発現が高まる。高齢者で認知機能障害が疑われる場合、疾患の症状ととらえる前に薬物の有害事象が合併している可能性を検討することも重要である。生理的予備能力の低下や複数疾患の合併・多剤併用など、薬物が認知機能障害を生じるリスクを高める要因が高齢者で多くみられる。

せん妄を引き起こしやすい薬物として重要なのは、抗コリン作用をもつ薬物である。抗コリン作用をもつ薬物の中でも、認知機能障害との関連で重要なものを表で示す。

薬物（分類）	代表的な一般名
フェノジアジン系の抗精神病薬	クロルプロマジン塩酸塩、レボメプロマジン
三環系の抗うつ薬	アミトリプチリン塩酸塩、クロミプラミン塩酸塩
パーキンソン病治療薬 （アセチルコリンエステラーゼ阻害薬）	トリヘキシフェニジル塩酸塩、ビペリデン
ヒスタミン H <sub>2</sub> 受容体拮抗薬	ファモチジン、ラニチジン塩酸塩
ヒスタミン H <sub>1</sub> 受容体拮抗薬（第一世代）	ジフェンヒドラミン塩酸塩、 <i>d</i> -クロルフェニラミンマレイン酸塩
頻尿治療薬	オキシブチニン塩酸塩

ベンゾジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬も抗コリン作用と同様に、認知機能障害と関連する報告がある。また副腎皮質ステロイド、抗てんかん薬、オピオイドもせん妄のリスクが上がる薬物として注意が必要である。

抗コリン作用をもつ薬物の副作用としては、他に口渇、便秘、排尿障害などもあるため症状発現に注意を要する。

加齢により薬物動態は変化し、高齢者では半減期の延長や最大血中濃度の増大により、薬効が強くなるのが問題となる。投薬に際しては処方量に注意が必要であり、長期的には効果と副作用の兼ね合いにより減量も考慮しなければならない。薬物有害事象を回避できるよう努めていきたい。